



## 東日本大震災 実録

今から11年前、私は近隣の長町小学校に教頭として勤務していました。当時、児童数900名を超える大規模校で教頭として震災に遭遇した私個人の、経験のごく一部ではありますが、一記録として記述致します。当時、私も含めて多くの人々が、通常の判断や他に配慮した行動をとることが難しい状況でした。今思えば目を背けたくなるようなこともありましたが、未曾有の大震災の発生直後の出来事であり、やむを得ない面もありました。問題については、反省は必要ですが、非難することはできません。

### 直前の避難所運営委員会

震災発生の数日前、学校を会場にして避難所運営委員会が開かれていました。町内会長をはじめとした地域内から選ばれた委員（有事の際は学校に駆けつけて避難所運営の要としての役割を担うべき方々）が、有事に備えた話し合いを行う場です。教頭として事務局を勤め、資料を整えて会を運営する中で、当時感じた雰囲気は、「避難所運営は学校の職務で、委員会に参加している委員の方々は、学校が地域から招いた来賓である」というようなものでした。話し合いの内容について詳しく触れることはいたしません、その数日後、東日本大震災が起きました。

### 震災発生と避難所開設・避難者の認識

震災発生直後、在校児童の被害がなかったことを確認して安堵しながら引き渡しの準備をしていると、続々と避難者が学校に押し寄せてきました。（その時は、沿岸部の津波による被害や福島原発事故については全く知りませんでした。）

体育館に集まった人数は3,000人以上。地区ごとに区画を設けましたが、座ることさえできない状態でした。想定をはるかに超える人数でしたし、学校にはまだ児童がおり、教職員は児童引き渡しの対応に追われていました。「避難所だろう」「どうするんだ」といった罵声も飛び交う中、ステージの上からハンドマイクで落ち着いていただくように呼び掛け、体育館に加えて校舎1階の教室も開放して地区ごとに割り振り、とりあえず座って休める状態で収容しました。

その後、児童の引き渡しを進める中で日が暮れました。大変寒い夜でした。保護者が迎えに来ない児童10名ほどを、別室に集めて休ませました。（全ての児童の引き渡しが終わったのは、翌日の夜でした。）

多くの児童の引き渡しが終わった後、職員は帰宅せず、すぐに避難所の運営にあたりました。備蓄庫にある毛布を配ったりわずかな食料を分配したり、体育館にストーブを設置したり等々。

学校という教育機関が避難所になるのではありません。避難所にふさわしい施設がないため、学校施設を利用するのです。校長は施設管理者として施設面で協力しますが、教職員の業務は児童の安全確保と教育の場再開に向けた準備です。（※2021年7月2日発行【校長室だより「仙台市の避難所運営」】参照）避難所は地域住民による避難所運営委員会が開設にあたり、その後避難者による運営への移行を目指します。しかし、当時、避難者の認識は、教職員が避難者のお世話をし、学校が避難所運営に責任を持つかのようなイメージであり、行政による周知も不十分でした。

### 教職員による避難所運営

二日目以降は、職員を交代で自宅に帰しました。（私と校長は帰れませんでした）三日目には、備蓄食料（クラッカーや水）や灯油の残りが目に見えて減ってきました。その頃には、周辺の被害が少なかったマンションの住民たちの多くが、自分たちのマンションの共有スペースを使用した避難に切り替えて引き上げたり、自宅に戻る住民も多くなり、1,500人程度にまで減ったと思います。しかし、そこから長い戦いでした。

避難所開設から三日もたっていましたが、「避難所運営委員」の方々は、避難所には現れませんでした。彼らを非難することはできません。それほどの大災害でしたし、それぞれに事情があったことでしょう。さらに当時の運営委員会での話し合い内容や組織自体が老朽化・形骸化しており、委員を来賓のように扱っていた学校側の対応にも問題があったと反省しています。

教職員の中でも、自宅や親族の被害が少なく、自宅が学校に近い者を中心にローテーションを組み、避難者への食料の配布やプールからトイレへの水の運搬・補充、その他避難者からの要望への対応等にあたりました。人数が多い中で、町内会ごとの代表者を選んで臨時の避難所運営委員会を立ち上げようとしたのですが、なかなか機能せず、教職員による避難者のお世話が続きました。

※裏面へ続く

..... 切り取り線 .....  
学校への御意見・御要望・校長に知らせたいこと など  
2022年3月11日（ ）年（ ）組 児童氏名

## 避難者による避難所運営の担い手

その後、教育委員会や市役所からの応援職員が数名駆けつけ、心強く感じましたが、さらにありがたかったのは、神戸や新潟から駆けつけてくださった各県庁・市役所職員の方々でした。それぞれに大震災を経験した彼らの助言や対応は素晴らしいものでした。教職員や応援職員が献身的に避難所を切り盛りしようと頑張っている様子を見て、「私たちも力になりたい」と最初に申し出てくれたのは、学区にある東北大学の職員宿舎にお住まいの、東北大学職員の皆さんでした。様々な専門分野をお持ちの方々に、情報収集や食料の分配、衛生管理など、理論的、組織的な避難所運営を計画し、実行していただきました。大変ありがたいことでした。その後さらに避難者の中から有志が集まり、地域住民による避難所運営という理想の形に近づくことができました。「避難所運営委員会」は、このような形での避難所運営について事前に話し合える、実働的な組織でなければならないと、改めて感じました。

## 支援物資の到着

四日目になると、支援物資として続々と食料が届くようになりました。それまで空腹に耐えながらの生活でしたので大変ありがたかったのですが、今度は、その多さに戸惑うことになりました。

果物やお米、パンやインスタント食品、飲み物など、教室いっぱいになっても、その後も、別の大型トラックが校庭にさらに新しい食料を置いていきます。生鮮食品は腐り始める始末でした。その頃には、私たちも沿岸部の被害の状況を理解していたので、配送トラックの運転手に、ここはもういいから、少しでも沿岸部に近い方に運んでもらえないかと頼みました。すると、東京から物資を運んできたという運転手は、「とにかく、どこかの避難所に置けば仕事は終わりなので、置いていきます。」とおっしゃって、食料を置いていきました。運搬する方々は、ピンポイントで必要な所に届けることを命じられていたわけではなかったようで、長町は道の被害も少なく幹線道路から近いことで、荷物を置いていくにはもってこいの場所だったようです。始めから、簡単に荷物を届けられる場所を探していた方がいたことも事実ですが、後日知りましたが、道路が破損していて沿岸部に届けられないと葛藤なさっていた運転手もいらっしゃったそうです。いずれにせよ、遠方から仙台まで届けて頂いたことには深く感謝しています。

## 避難所での修羅場

避難所開設当初から、ごく一部の避難者からではありませんでしたが、不満の声を浴びせられることもありました。一部に「避難者は行政サービスを受けに来たお客様」であり「サービスを提供するのは学校の教職員である」といった誤解がありました。避難所での生活が長引く中で、避難者は少しずつ自宅に帰りはじめましたが、昼間は外に出ている、夜になると1階の教室と体育館は避難者でいっぱいでした。3月とは、こんなにも寒かったのかと思い知らされる毎日の中で、灯油補給の目処が立たず、節約のために、毎日20:00にはストーブを消すことにしていましたが、ある寒い夜、私が体育館のストーブを消しにいくと、一人の男性が「てめえ、こんな寒い日に殺す気か！」と暴言を吐いたかと思うと、次の瞬間、私はその男性に顔面を殴られました。その様子を見ていた神戸で震災を経験したという男性が立ち上がり、私を殴った男性と口論の末もみ合いになりました。私はその間に挟まれて大勢の避難者の中を動き回っていましたが、女性の「もうやめてー」という叫び声で、騒ぎは収まり、体育館はシーンと静まりかえりました。皆つらい気持ちでした。避難所での異常な心理状態を象徴する一例ですが、他にも、食料の奪い合い、保健室のベッドの占有、盗難、施設の破損等、悲しい出来事はいくつかありました。

## 避難所の閉鎖

3月20日過ぎに、卒業式を行うために、体育館を一時的に片付けることになり、避難者の方々には快く協力していただきました。その後もまた体育館は避難所にはなりませんが、避難者はさらに自宅に戻り、3月末には300名程度まで減りました。学校再開に向けての準備のため、最終的に残った100名ほどの方々が富沢市民センターの避難所に移ったのは、4月7日でした。

## 避難所運営からの教訓

近隣でも、多くの避難者に対し、教職員を中心とした避難所運営を行った学校がありました。その中で、自宅に戻らずに避難所運営にあっていた教職員が、学校で倒れて亡くなるという悲しい出来事もありました。仙台市ではその後、市民アンケートをはじめ実際に運営に携わった教職員や地域の方々、避難所の施設関係者の方々からの声を基に、東日本大震災における避難所のあり方や運営体制における様々な課題について洗い出し、検証しながら、新しい「避難所運営マニュアル」を作成しました。(※2021年7月2日発行【校長室だより「仙台市の避難所運営」】参照)

## おわりに

「津波てんでんこ」等、災害時には「自分の身を守るために自分で判断する」という意識も重要だと言われており、教訓として子供たちに伝え、意識を高めていくことが必要です。一方で、東日本大震災のように在校時間中に災害が起きた場合は、集団生活中に子供たちが自分の判断で行動することは現実的ではありませんし、日々の学校生活の中で教職員と子供たちとの信頼関係をより深める努力をしながら訓練や指導を行っていることや、小学生の発達段階を考えると、子供たちは職員を信じて指示を受けて行動することでしょう。その信頼を決して裏切ることのないよう、学校においては「子供たちの命を守る」ことを最優先に対応することを改めて肝に銘じながら災害に備え、職務にあたって参ります。